

論文

出来事の否認に抗う

——パレスチナ人の「ナクバ」の語りの挑戦——

金城 美幸*

1. はじめに

今日のパレスチナ人の集合的アイデンティティの中心にはある出来事が存在する。それは1948年のイスラエルの建国に伴う、土地からの退去、難民化、離散、故郷喪失の経験である。パレスチナ人社会では1948年に起こった一連の出来事は、「ナクバ」（アラビア語で「大災厄」）という語で語られる¹。パレスチナ人にとって「ナクバ」は、今日まで続くパレスチナ人の苦難を説明すると同時に、パレスチナ人難民の故郷への帰還の権利および補償を求める政治要求の根拠となっている。

しかし現在の国際政治において「ナクバ」の語りは抑圧されている状況にある。1948年に発生したパレスチナ人難民の帰還権は、国連総会決議194号（48年12月）で承認されながらも、イスラエル側はそれを一貫して拒否し続け、そのような状況を国際社会も見逃してきた。その後イスラエルはパレスチナにおける支配地域を拡大させ、結果、イスラエル社会の「独立戦争」の語り²は、パレスチナ人の語りを否認・抑圧しながら支配的な地位を占めている。

本論文は、イスラエルおよびアラブ諸国の歴史記述からパレスチナ人の「ナクバ」の語りが排除されてきた点を論じ、そのなかでのパレスチナ人の語りの対抗戦略と課題を検討する。そもそも「ナクバ」の語りの構築過程を検討する先行研究は数少なく、[Picaudou 2008] [Slyomovics 2007:27-9] [Davis 2007:55-58] など概説的なものに留まる。これらの研究は、イスラエルの「独立戦争」の語りへの対抗的言説として「ナクバ」の語りを捉え、それを積極的に評価する点で共通している。ただし [Picaudou 2008] は、「ナクバ」の語りがパレスチナ人を「イスラエル政治の受動的犠牲者の位置に還元する」パラダイムとなっている点を指摘するが、そのパラダイムをどう対象化するかは深めていない。

対立が1世紀近くも続くパレスチナ／イスラエルでは、「独立戦争」および「ナクバ」をなど、強固なパラダイムが歴史の語りを規定し、かつそれが政治的に利用される現象が顕著に現れている。しかしそもそも言葉を当てはめられ、意味づけられ、物語化されて「歴史」となる以前に、原初的経験としての過去実在が存在する。それは唯一経験者によって知覚されるものである。そうした経験を読み、聞き、語る歴史家の言述行為によって語りが構成される。この歴史の語りではさまざまな修辞法が用いられ、結果、歴史はプロット・議論・イデオロギーを構成してきた [White 1975]。同様に、パレスチナ人社会で自明とされる「ナクバ」の語りにも、個人の経験に意味とプロットを与え歴史化する過程があった。本論文では歴史の語り一般を相対的に捉えた上で、「ナクバ」のパラダイムの脱構築の前段階として、「ナクバ」の語りの排除の有様と、それへの対抗として構築されてきた「ナクバ」の語りの戦略を検討し、その課題を明らかにする。このアプローチは、深刻な対立が続く現実において相対主義的で傍観者的立場とも見えるが、パレスチナ社会とイスラエル社会の語りどちらにも同一化することなく、それらの構築過程を記述することで、逆に両社会の間の支配・抵抗関係を浮き彫りに出来ると考える。

キーワード：ナクバ、記憶、証言、語り、歴史記述

* 立命館大学大学院先端総合学術研究科 2004年度入学 共生領域

2. イスラエルとアラブ諸国での歴史記述——パレスチナ人の経験の不在

現在、歴史的パレスチナ（イスラエル領およびヨルダン川西岸地区・ガザ地区）の大部分を支配・占領しているのはイスラエル国家である。1948年の戦闘後、パレスチナの一部に主権を確立したイスラエルは、67年にパレスチナ全域およびシリア領ゴラン高原を支配下に治めた³。この支配拡大のなか、「ナクバ」を語り故郷への帰還権を訴えるパレスチナ人難民の声はイスラエル社会から否認されてきた。その理由は、イスラエルが「ナクバ」を承認すればパレスチナ人難民の故郷への帰還権の承認も迫られ、「ユダヤ人国家」の存亡が危機に瀕するからである。それゆえ現在のイスラエルに対するパレスチナ人の闘争目標は、イスラエル社会で「ナクバ」が承認されることにある。

イスラエル社会でのナクバの否認は建国以降社会的メカニズムとして機能してきた。パレスチナ人の土地の大規模接収、アラビア語地名のユダヤ・ヘブライ的地名への変更、脱アラブ化のための都市計画などの形で「ナクバ」を想起させる空間が消去された。そして代わりにユダヤ人新移民のための居住地が作られ、パレスチナ人難民の帰還を実質的に不可能にする既成事実が作られてきた⁴。その一方で、イスラエル社会で構築された1948年についての「建国神話」では、パレスチナ人の難民化の原因はパレスチナ人自身、あるいはアラブ人に帰され、パレスチナ人は自ら土地を離れた、またはアラブ人指導者の命令に従って土地を離れたとする「自発退去論」が正史であった〔Flapan 1987〕。

この「建国神話」の根拠を国家アーカイヴス史料から切り崩し、国内外で大きな注目を集めたのが1980年代後半に登場した「新しい歴史学」だった。「新しい歴史学」が注目されたのは、その代表的存在であるベニー・モリスがパレスチナ人難民の発生原因を検証した際、アラブ側の報道調査からパレスチナ人の「自発退去」の事実が存在しなかったことを明らかにしたパレスチナ人の主張〔Khalidi 1959〕と重なり合う結論を下したためだった。この新潮流はパレスチナ人との対話の道を開くものと期待されたが、それとは裏腹にモリスの「新しい歴史学」は、パレスチナ人の歴史研究に対し、むしろ冷淡な態度を見せてきた。その理由は、モリスは1948年の出来事をパレスチナ人に降りかかった「ナクバ」ではなく、アラブ諸国と新生イスラエル国家との「戦争」と理解しているためである〔Morris 1987:17, 286〕。そのため「新しい歴史家」の48年についての記述は、確かに従来は描かれてこなかったシオニスト側の加害の事実を明らかにしたとは言え、それはアラブ諸国との一連の戦闘行為の過程として捉えられ、パレスチナ人の「ナクバ」をもたらし加害者としてシオニスト社会を描くことはなかった⁵。

モリスのこの「戦争」の認識を支えるのは、パレスチナ人の民族性の否認の論理である。モリスはパレスチナ人という民族主体を想定しておらず、あくまでより大きなカテゴリーである「アラブ民族」の一部としてパレスチナ人を扱うことで、パレスチナ人の土地との結びつきを否定しパレスチナ人の移送を正当化した。

少なくとも1920年代あるいは30年代に遡れば、パレスチナのアラブ人たちは自分たちを確固たる「民族」と見ていなかったし、他の者たちもそうは見えていなかった。彼らは「アラブ人」として、あるいはより具体的に言えば「南シリアのアラブ人」と見なされていた。それゆえ彼らをナブルスやヘブロンからトランスヨルダン、シリア、そしてイラクへまでも移送することは——とりわけ適切な補償が受けられるなら——故郷からの追放と同義ではないだろう。〔Morris 2004:42〕

興味深いことに、このモリスのパレスチナ人の民族性の否認は、建国の礎を築き、その後も長らく国家を主導したシオニズム運動内の労働運動（イスラエル労働党の源流）内に長らく根付いてきた思想と通じている。パレスチナ人を「より大きなアラブ民族」の一部とし、そのナショナリズムを否認する彼らの議論は、パレスチナ人にはパレスチナ外部にも故郷があると結論付けることで、パレスチナ人から故郷を奪うという道徳的ジレンマを回避してきたのだった〔Mori 2009:96〕。

パレスチナ人を民族主体と捉える視点の欠如は、アラブ側の歴史記述の方法論を問題視するモリスの立場の中にも表れている。モリスは、アラブ諸国の研究者による歴史研究もパレスチナ人によるものと同じ「アラブ人の歴史記述」として扱っている。そして国家史料のみが真実を示すとのモリスの原則的立場からは、アラブ諸国では国家史料が開示されていないためにその歴史記述は客観的な研究となっていないとされ、イスラエルの国家史料に基づ

くことが唯一客観的歴史記述に至るとの結論が下される。

確かに、イスラエルの独立宣言（48年5月14日）の翌日に戦闘に参加したトランスヨルダン、イラク、エジプト、シリア、レバノンのアラブ5カ国は、48年の戦闘の重要なアクターであり、各国の関与のあり様を示す史料の公開は48年の歴史記述にとって必要である。しかし離散・難民化の当事者たるパレスチナ人の経験は、明確な政治的・軍事的意図を持ったアラブ諸国の政治家・軍人が残した文書に表れるものではない。モリスは48年の出来事をイスラエルとアラブ諸国との間の戦闘と理解したのと同様に、イスラエルの歴史記述の対立物としてアラブ人の歴史記述を挙げるが、そこではシオニストとアラブ諸国それぞれの政治的思惑のなかで翻弄されるパレスチナ人の「ナクバ」の経験が見過ごされているのだ。

アラブ人社会において「ナクバ」の語を最初に用いたのは、その当事者たるパレスチナ人ではなく、アラブ・ナショナリズムを牽引する周辺アラブ諸国の知識人だった。その最初のもはシリアの哲学者コンスタンティン・ズライクが早くも1948年8月にベイルートで出版した『ナクバの意味 Ma'nat al-Nakba』であった。しかしズライクにとって「ナクバ」は、アラブ諸国とイスラエルとの間の「戦闘」における「敗北」だという点に留意したい。後に論じるパレスチナ人の語りではシオニストの加害性が強調された⁶が、ズライクの議論はそうした語りとは距離がある。アラブ・ナショナリストだった彼の問題意識はむしろ、近代的体制への過渡期にあるアラブ諸国がシオニズムに敗北したことによる価値の崩壊状態からの脱却を叫ぶことだった [Zurayk 1956:4]。つまりズライクの議論は、アラブ社会の政治的・軍事的再建を目的として、「ナクバ」をもたらしした社会・経済的原因を自己批判的に分析するものだった。

ズライクの議論は「ナクバ」の語りの出発点とされ、「ナクバ」の語りの歴史性を強調されている（例えば [Ghanim 2009: 43]）。だがズライクの立場は、パレスチナ人の「ナクバ」の語りとは異なるだけでなくアラブ知識人の「ナクバ」への態度も代表していない。48年以降のアラブ諸国はそれぞれの利害に基づき国家建設を進めたため、敗因をめぐる評価も統一的ではなかった。むしろ48年時点でのアラブ諸国間の緊張関係⁷と戦闘に参加した軍人たちの国内の政治家への反発が反映された複数の語りが存在したのだ。

本論文はあくまでパレスチナ人の「ナクバ」の語りの歴史的条件に焦点を当てるので、ここではアラブ諸国での1948年をめぐる歴史記述は [Picaudou 2008] に沿って簡単に紹介するに留める。まずイラクでは、イラク軍の行動が受動的だったとの批判を退ける努力がなされ、代わりにトランスヨルダンの「アラブ軍」がイラク軍への支援を拒んだ点や、国内の政治家たちがパレスチナの大義を見捨てた点を糾弾する傾向が強かった。またシリアの歴史記述は、トランスヨルダンのパレスチナへの野心を脅威と描く点が特徴的だった。エジプトでの語りは、国内の政治家たちの大義への不誠実さを主題化する傾向が強い。エジプトの歴史記述、特に体制の打倒を目指す自由将校たちは、国王および彼の側近たちが旧式の武器しか用意しなかった上に、イスラエルとの休戦協定（48年6月11日～7月8日）の受諾によって、イスラエルがソ連圏から武器を調達する条件を作ったと批難した。これらの国に比べ特異な語りを示しているのがヨルダンである。それはヨルダン国王がシオニストと秘密交渉を行い、双方の間でのパレスチナ分割を了承していた事実によっている。この事実が露呈すれば、国王はアラブ諸国からの糾弾を免れない立場にあったため、ヨルダンでの歴史記述ではこの秘密合意への国王の関与を取り上げることはほとんどない⁸。

これらの語りは、現実政治におけるアクターとしての地位を確立しつつあるイスラエルとの軍事・政治的対立における敗因とその責任に焦点を当てているが、それは主に戦闘に参加・関与した軍人・政治家たちの関心を反映したものだ。それゆえこれらの語りでは軍人・政治家たちの回想録が大きな比重を占めてきた。これらアラブ諸国での記述と、建国以降のイスラエルでの語りの間には対応関係が見られる。イスラエルの従来の歴史の語りも、軍人たちの証言や回想録、記憶に頼るものが主流だった [Morris 1988:25]。イスラエル人研究者アブラハム・セラも、アラブ人の48年についての歴史記述の大部分が「史料批判に基づく歴史記述であるよりも、集合的記憶に基づく、非学術的な著作から成り」、イスラエルの歴史記述の伝統とパラレルな関係にあることを指摘した [Sela 1991:125]。このなかでパレスチナ人の「ナクバ」の経験は、アラブ諸国とイスラエルでの語りの双方から排除されてきたのだ。

3. パレスチナ人の「ナクバ」の語り——離散・散逸する過去の記録と対抗的記憶

イスラエルとアラブ諸国の歴史記述においてパレスチナ人の経験が排除されて来たなか、パレスチナ人は独自の「ナクバ」の語りを構築してきた。しかしパレスチナ人の置かれた離散・難民化・被占領の状態を省みると、歴史研究としての困難が存在する。それはパレスチナ人自身と同様、過去を伝える史料も離散し接収されてきたためである。

1948年以前、パレスチナでは学術研究・文化センターが形成途上にあっただが、「ナクバ」以降は10都市がイスラエルに併合され、ナザレを除く都市では元の住民がほぼ完全に退去させられた。それにより公設図書館、印刷所、出版局、土地登記所、市議会、病院、学校、文化センターなど公共機関がイスラエルに破壊・接収された。同様に接収・離散・散逸を余儀なくされた個人図書館・家族の記録、日記も多く存在する。例えば後にパレスチナ社会の歴史を書くムスタファー・アッダッバークは、48年に故郷ヤーファーを退去する際、それまでに集めた草稿や史料も一緒に運ぶつもりでいた。しかしヤーファー港から出航するとき、船は既に耐久重量以上に達していたため、彼は自身の6千枚もの草稿を海に投げ捨てざるを得なかった。またエルサレム生まれの教育者ハリール・アッサカーキーニーは、彼が多大な努力をかけて設立した図書館を失った嘆きを表している。「さらば、私の書物よ！我々が去った後お前たちがどうなったのか、私は知らない。略奪されたのか、燃やされたのか？公設・私設図書館に無事移動させられたのか？あるいは食品店に運ばれ、玉ねぎを包む紙にでも使われているのか？」[Sakākīnī 1955:393-4]

1967年、イスラエルが占領地を拡大させた数日後には、西岸地区のヨルダン行政府と情報機関、およびガザのエジプト行政府本部に収められていたパレスチナ民族運動についての史料がイスラエル軍に接収された。その後これらの史料はイスラエル国家アーカイヴに移され、イスラエルの歴史家たちが活用できる史料となった⁹。法的に言えば、パレスチナ人はイスラエルのアーカイヴにアクセスできるが、実際はイスラエル領内に住むパレスチナ人を除けば、移動のための特別許可が必要となり、現在は取得が非常に難しい。そのためパレスチナ人にはイスラエルのアーカイヴへのアクセスの可能性がほとんどない。

史料の接収はイスラエルによるものだけに留まらない。アブド・アルカーディル・アルフサイニーが率い、48年にシオニスト軍と戦ったパレスチナ人志願兵組織「聖戦軍 (Jaysh al-Jihād al-Muqaddas)」の史料はイスラエルとヨルダン双方からの接収過程を経た。聖戦軍の史料は48年に最初の一部が消失してから、さらに3段階を経て消滅した。48年以降西岸地区のビル・ゼイトとアイン・シーニヤにその主要部分が移されたが、その後ヨルダン軍が接収し今日まで状況は不明である。またフサイニー家のメンバーが史料の一部を隠し持っていたが、67年、イスラエル軍に奪取されることを恐れ焼却されたと言われる。またファイサル・フサイニーが管理する「アラブ研究所アーカイヴ」(エルサレムのオリентハウス・コレクションの一部)に収められた史料も一部あったが、2001年、フサイニーの死の2日後、イスラエル軍がオリентハウス・コレクション全体を接収した。[Abdul Jawad 2006: 92-4]

「ナクバ」の史料保存が困難であるパレスチナ人は、「ナクバ」へ接近するために創造的な歴史記述の方法論を探求する必要に迫られてきた。当初パレスチナ人による「ナクバ」の歴史研究は、当時起こった事実を確定し詳細に描写することに力が注がれた。それは「ナクバ」の詳細を確定し事実として示すことが、パレスチナ人の権利承認への道として必要とされたためである。それゆえパレスチナ人による「ナクバ」の歴史研究には48年以前に存在した各村についての地誌の系譜が存在する。その最初の包括的研究であるアーリフ・アルアーリフの『ナクバ——エルサレムのナクバと楽園の喪失』[al-ʿArif 1956～60] (全6巻)は、48年当時のパレスチナ人村での戦闘と難民化の過程を記した¹⁰。また前節で触れたアッダッバークは離散先で史料を再び収集し、大作『我らの祖国パレスチナ』[al-Dabbāgh 1965-1976] (全11巻)にて破壊された、あるいは現存するパレスチナ人村のデータを集約し「ナクバ」以前の各村の様子を再構成した¹¹。

この系譜のなかでも、英語を用いて、イスラエルを含めた海外からよりアクセスしやすい形で精力的に研究を発信したのがワリード・ハリディである。ハリディはパレスチナ研究所 (ワシントン D.C)、ビル・ゼイト大学 (西岸地区)、社会調査のためのガリラヤ・センター (イスラエル領内ナザレ) の三機関の協力の下、1986年から研究プロジェクトを発足させ、世界に離散する「ナクバ」経験者の証言、あるいは経験を物語る史料を発掘し、破壊されたパレスチナ人村の網羅的記録 [Khalidi 1992] を作った¹²。しかし問題だったのは調査対象がイスラエル領内にあ

ること、村の多くが破壊され「ユダヤ化」されたためデータの集積・照合が困難なことだった。そのため文書史料によるデータ集積と共に、村民たちの証言に基づく調査が重要な作業として浮上した¹³。

ハリディによるプロジェクトと同じ時期、ビル・ゼイト大学では破壊された村への追悼の意味を込めた「追悼モノグラフ」の作成プロジェクトが始まった。破壊された13村についての追悼モノグラフ・シリーズが85年から出版され始めたが、87年に始まった第1次インティファダ後のイスラエルの占領政策の強化により、プロジェクトは中断を迫られる。88年1月9日、イスラエル占領行政府からパレスチナ人の大学を閉鎖する軍令が出され、93年までプロジェクトの中断を余儀なくされた。[Abdel Jawad 2007:62]

本プロジェクトの特徴は、人類学的研究ではなく歴史研究である点を強調し、「ナクバ」の事実を追求する点である。そのため村の状況や「ナクバ」についての情報を証言から充実させるだけでなく、イスラエルのアーカイヴ史料や二次資料との照合が行われた。プロジェクトに従事したサーリフ・アブド・アルジャワードが経験的に得た結論は、証言内容には文書史料からも裏付けられるものも多く、一定の正確さがあることだった。[Abdel Jawad 2007:68]

こうした研究蓄積を背景として、「ナクバ」の証言から出来事を再構成する試みは近年著しく増えている¹⁴。これは1998年、「ナクバ」から50周年にあたりその記憶のあり方をめぐって行われた集中的議論の延長線上にある。90年代後半は、イスラエルとの和平プロセスが数々の問題に直面しながらもまだ人々の期待を引き止めていた時期だった。この時、将来に誕生するパレスチナ人国家においてどのような集合的記憶を形成するのか、その集合的記憶からどのような権利をイスラエルに請求するのか、集中的に論じられた。2000年代に入り和平への期待が裏切られたことが明らかになると、苦難がいつ終わるとも知れないなかで「ナクバ」経験者たちが亡くなっていくという事態がいよいよ明確になり、世代間の記憶の継承の問題が注目され始めた。現在の「ナクバ」の記憶の集積は、体験者世代が消失する危機感のなかで進められているが、そこで記憶は「ナクバ」を否認する語りへの対抗言説を打ち立てる武器だとされる。

記憶は不利な状況に置かれている人びとが利用できる数少ない武器の1つである。記憶は〔歴史という〕壁を揺るがすべく滑り込むことができる。パレスチナ人の記憶は、稲妻のようにとどろくシオニズムの物語によって沈黙させられている状況のなかで、保持され社会的に生産されることで、反乱的な記憶、すなわち対抗的記憶となる。[Abu-Lughod & Sa'di 2007:6]

しかしこうした証言に基づくパレスチナ人の「ナクバ」の語りにも、「新しい歴史学」は冷淡な態度を取ってきた。モリスは証言や記憶は「〔真実との間の〕巨大なギャップ、高齢化と時間による破壊、恐ろしいまでの歪曲と選択性、情報の損害、偏見そして政治的信条および利害」を免れないとする [Morris 1987:2]。これに対しアブド・アルジャワード [2007] は、証言に真実性を与えるために文字史料との照合が必要だが、記憶を、そこから出来事を再構成し歴史的な脈を明らかにしうる契機と見ている。モリスは、記憶と歴史の間に架橋できない分断を設定し、記憶は史実に反すると前提していたが、アブド・アルジャワードは体験者の記憶の聞き取り・検証から、記憶と歴史を架橋する可能性を示したのだ。そして証言の検証作業から、「ナクバ」においてこれまで想定されてきた以上の虐殺が存在したとの確信を持つに至り、これまで光が当てられなかった声なき経験をさらに発掘する道を開いた¹⁵。

4 苦難の語りのジレンマ

記憶は文書史料による裏づけを必要とする歴史概念に対抗する武器だと期待されているが、一方で「ナクバ」の記憶はそのトラウマ的性質のゆえに語る行為そのものに困難が伴う。それは苦難の経験は、それを自らのものとして受け止め言語化し、語りの様式を与えるまでには時間がかかるためである。とりわけ難民化・離散・被占領の経験を強いられ続けているパレスチナ社会では、語られる過去とは実存が脅かされる現在の只中で想起されている。それにより過去を相対的な立場から語ることの困難がより顕著に表れる。

パレスチナ社会の知識人層からは、検証を経た「ナクバ」の事実からどのような語りを紡ぐべきかという、語りの様式への問いが提起され、それと同時に従来の語りへの批判が投げかけられた。とりわけ「ナクバ」50周年行事

が西岸地区・ガザ地区で組織された際、自治政府役人らを中心とした「ナショナリスト」の自己批判を欠いた「ナクバ」の語りに対し、ラシード・ハーリディ、エドワード・サイード、マフムード・ダルウィーシュら知識人からの批判が集中した。彼らの批判は、パレスチナ人は、シオニストという自らの力を超えた存在の組織的暴力に晒された無実の存在であるため、追放は不可避だったという語りナショナリストらの「ナクバ」のプロットの前提となっており、それが無批判に継承され、かつ社会的な広がりを見せている点に向けられた。彼らはこれを、記憶に埋没し「歴史性を欠如」させた状態とし、「ナクバ」という大きな語りそのものの適切さを疑問に付すまでに至った [Hill 2005:3-4]。

こうした問題提起は、「ナクバ」の語りを政治的武器として用いるナショナリストに対してだけではなく、「ナクバ」経験者たちにも投げかけられた [Tamari 2003:173] ため、パレスチナ社会では非常にセンシティブな問題となった。経験者の語りに対してタマーリーが発した批判は、個人的で、ローカルで、意味が与えられる以前のものとして存在するはずの個々の体験が、集合的で、ナショナルで、意味を伴った教訓的な語りとなっていることに向けられている。この批判は、難民の女性の証言を調査したローズマリー・サーイグからの「ナクバ」の既存の語りへの批判 [Sayigh 1998;2007] とも調和をなす。サーイグは、レバノンの難民キャンプ内でのオーラル・ヒストリー調査から、パレスチナ社会で女性の語りは、「寓話 hikāya」に分類される一方、男性の語りは現実に起こったことを伝える「物語 qiṣṣa」だとされ、「歴史 ta'riḫh」はもっぱら後者に結び付けられている点を指摘した [Sayigh 2007:137]。彼女は「ナクバ」は全てのパレスチナ人を国家喪失状態に陥らせた点ではパレスチナ人に共通の経験とは言え、その詳細は階級、党派、宗教、地域、攻撃の時期、老若男女、裕福なものと貧しいもの、土地を去ったもの、留まったものによって異なると述べ、集合的な物語に内的な差異を含みこむ必要性を主張する。

しかし留意したいのは、ここで批判を行う知識人たちの目的は、あくまで「ナショナリスト」たちが占有する「ナクバ」の語りの脱構築であり、48年の経験をより適切に表象する新たな民族史の構成である。それは現状では、ナショナルな歴史を乗り越える方向性であるよりも、パレスチナ社会のナショナルな語りに内在する許容範囲をより広く再定義する試みだと言える。

この試みは植民地の住民が民族独立を掲げ、隷属状況からの解放のためにナショナルな語りを必要とした脱植民地化の過程で現れたジレンマと結び付けられる。それはサバルタン・スタディーズに見られた、反植民地闘争の主体形成の際、主体を本質主義的な形で定義せねばならないというジレンマに通じる。植民地支配からの解放を目指す反植民地主義運動はナショナルな主体構築を行うにおいて、ナショナルな枠に収まらない内的な語りを抑圧してしまう。この問題はパレスチナ人が自分たちの要求を、あくまで国際政治の場で民族的権利として承認・履行されることを戦略として選択する以上、避けては通れない問題である。パレスチナ社会において、ナショナルな歴史の語りという戦略に埋没することなく、その枠組みに収まらない語りの承認が、どのように存在しうのか今後検討を深めたい。

注

- 1 「ナクバ」はアラビア語の普通名詞で「大災厄」を意味するが、1948年の出来事としての「大災厄」に言及されるとき、定冠詞「アル」が付けられ「アルナクバ」(アラビア語発音法則に近づけた日本語表記を取れば「アンナクバ」となる。しかし本論文では「ナクバ」と表記する。その理由は、例えば近年の広河隆一監督作品『パレスチナ 1948—NAKBA』公開に示されているように、日本のパレスチナをめぐる言説空間のなかで「ナクバ」の語が一定の定着を見せているためである。
- 2 イスラエルでは、1947年12月以降のパレスチナ人および周辺アラブ諸国軍との一連の「戦闘」について、「独立戦争」あるいは「解放戦争」という語で語る。「独立戦争」の語りに内在する「建国神話」については [Flapan 1987]、[金城 2007:122-3] を参照。
- 3 同じ時、イスラエル軍はエジプト領だったシナイ半島も占領したが78年のエジプトとの和平条約にて返還を決定した。
- 4 近年のイスラエルにおける「ナクバ」否認の例に、2007年から09年にかけて起こったイスラエル版「歴史教科書問題」がある。07年、労働党のユリ(ヤエル)・タミール教育相の下、48年の出来事を「ナクバ」と表現したイスラエル国内のパレスチナ系学校の歴史教科書が認可された。しかし09年、カディマからリクードへ政権が交代すると、リクードのギデオ・サル新教育相の下で、歴史教科書における「ナクバ」の語の使用が禁止された。また同年、イスラエル国内での「ナクバ」追悼行為を非合法化する法案が国会に提出され、2010年5月に量刑を緩和された「ナクバ法」案が「立法に関する閣僚委員会」を通過した。

- 5 2000年にパレスチナ人の第2次インテリファードが始まりイスラエル社会が右傾化を遂げると、モリスはむしろ48年のシオニスト指導部の政策・軍事作戦を正当化する発言を始め、大きな反響を呼んだ。彼は48年にパレスチナ人に対して行われた行為が民間人を対象とした犯罪である「民族浄化」だった点を認め、かつ当時はそれが正当化される状況だったと述べた。[Shavit 2004]
- 6 脚注12参照。
- 7 アラブ諸国がそれぞれ異なる利害を抱えながら1948年の戦闘に参加した様子は[Rogan & Shlaim 2001]に詳しい。
- 8 イスラエルの「新しい歴史家」アヴィ・シュライムの研究[Shlaim 1988]はこの秘密合意を描き話題となったが、これを最初に明るみに出したのは英委任統治期エルサレム知事アブドゥッラー・アッタルの『パレスチナの災難 Kārithat Filastīn』(1959年)だった。アッタルは1949年にエジプトへ渡ったがアブドゥッラー・ヨルダン国王暗殺(1950年)嫌疑がかけられ、死刑宣告が出された。
- 9 例えば[Cohen 1982]。
- 10 本書は、1947年11月29日国連パレスチナ分割決議以降のシオニストとの戦闘、およびその結果について1952年まで記述している。
- 11 本書はパレスチナ自治政府発行の小学校用アラビア語教科書『美しき我らの言語 Lughatnā al-Jamīla』(第6学年用)の題材となっている。本教科書第8課のタイトルが「ムスタファー・ムラード・アッダッバグ」で、生徒には『我らの祖国パレスチナ』に基づきイスラエル領も含めた歴史的パレスチナの都市・村の特徴を要約する課題が与えられている。
- 12 「ナクバ」以前のパレスチナ社会を、主に写真史料から再構成した作業に[Khalidi 1984]がある。ハーリディはまた、「ナクバ」を否認するイスラエル社会に対し自分たちの権利を要求せねばならない状況の下、イスラエルの「建国神話」に明確な挑戦を行う形で「ナクバ」を語った第一人者である。彼の作業は、シオニスト指導部が策定したパレスチナ人の追放計画(「ダレット計画」)の存在を明らかにする作業[Khalidi 1961;1988]を始め、「ナクバ」をもたらしたイスラエルの政策についての史料編纂[Khalidi 1987;1998]を行っている。
- 13 本書の目的は軍事史の記述ではなく、「地方の最もミクロなレベルから、都市における追放という人口減少まで焦点を当て、その史料を物語全体に統合する試みはない」[Khalidi 1992: xvii]とされる。つまりミクロなレベルでの事実の究明に焦点を当て、統合的な語りを準備する作業と理解できる。
- 14 例えば[Abu Dheer 2007]、[Toubbeh 1998]など。破壊された村の情報や難民の「ナクバ」の証言を集めるインターネット・サイトの登場も近年顕著に見られる。村の情報や証言を包括的に集積するサイト(<http://www.palestineremembered.com/>)の他、「ナクバ」50周年に合わせて「ハリール・サカーキーニー文化センター」(ラーマッラー)が「ナクバ」特設サイトを作った(<http://www.alnakba.org/>)。また2002年に発足した「ナクバ・アーカイヴ」プロジェクトは、レバノンの難民キャンプで「ナクバ」の証言を公開している(<http://www.nakba-archive.org/>)。こうしたインターネット・サイトは、調査情報の集積・開示だけでなく世界中に離散するパレスチナ人の情報提供・交流の場ともなっている。
- 15 同様の試みとして重要なものに[Nazzal 1978]がある。

<参考文献>

- Abdel Jawad, Saleh. 2006. "The Arab and Palestinian Narratives of the 1948 War." In Israeli and Palestinian Narratives of Conflict: History's Double Helix, ed. Robert I. Rotberg 72-114. Bloomington: Indiana University Press.
- 2007. "Zionist Massacres: the Creation of the Palestinian Refugee Problem in the 1948 War." In Israel and the Palestinian Refugees, ed. Eyal Benvenisti, Chaim Gans, and Sari Hanafi. 59-127. Berlin, Heidelberg. New York: Springer.
- Abu Dheer, Ala. 2007. Nakba Eyewitness: Narrations of the Palestinian 1948 Catastrophe. Nablus: An-Najah National University.
- Abu-Lughod, Laila. & Ahmad Sa'di. 2007. "Introduction: The Claims of Memory." In Nakba: Palestine, 1948, and Claims of Memory, ed. Ahmad Sa'di and Laila Abu-Lughod. 1-24. New York: Columbia University Press.
- Al-`Ārif, Ārif. 1956-60. al-Nakba wa al-Firdaws al-Mafqūd 1947-1952 (The Catastrophe and the Lost Paradise, 1947-52). Bayrūt: al-Maktabat al-`Aşrīya.
- Al-Dabbāgh, Mustafa' M. 1965-1976. Bilādunā Filastīn (Our Country, Palestine). Bayrūt: Dār al- ṭalī'a.
- Cohen, Amnon. 1982. Political Parties in the West Bank under the Jordanian Regime, 1949-1967. Ithaca: Cornell University Press.
- Davis, Rochelle. 2007. "Mapping the Past, Re-creating the Homeland: Memories of Village Places in Pre-1948 Palestine." In Nakba: Palestine, 1948, and the Claims of Memory, ed. Ahmad. Sa'di and Laila. Abu-Lughod, 53-75. New York: Columbia University Press.
- Flapan, Simcha. 1987. The Birth of Israel: Myths and Realities. New York: Pantheon.
- Ghanim, Huneida. 2009. "The Nakba." Jadal, No. 3 (May) :41-49.
- Hill, Tom. 2005. "Historicity and the Nakba Commemorations of 1998." EUI Working Papers RECAS No.2005/33. European University Institute.
- Khalidi, Walid. 1959. "Why Did the Palestinians Leave?" Middle East Forum, Vol. 24 (July) : 21-24.

- . 1961. "Plan Dalet: The Zionist Master Plan for the Conquest of Palestine." *Middle East Forum*, Vol. 37, No. 9 (November) : 22-28.
- . 1984. Before Their Diaspora: A Photographic History of the Palestinians 1876-1948. Washington D.C.: Institute for Palestine Studies.
- ed. 1987. From Heaven to Conquest: Readings in Zionism and the Palestine Problem Until 1948. Washington D.C.: Institute for Palestine Studies.
- . 1988. "Plan Dalet: Master Plan for the Conquest of Palestine." *Journal of Palestine Studies*. Vol. 18. No. 1 (Autumn) : 4-33.
- ed. 1992. All That Remains: The Palestinian Villages Occupied and Depopulated by Israel in 1948. Washington D.C.: Institute for Palestine Studies.
- . 1998. "Selected Documents on the 1948 Palestinian War." *Journal of Palestine Studies*. Vol. 27. No.3 (Spring) : 60-105.
- 金城美幸 2007. 「イスラエルにおける歴史記述とパレスチナ難民問題——ベニー・モリスの歴史記述を中心に」『Core Ethics』第3巻, 121-132.
- Mori, Mariko. 2009. "Zionism and the Nakba: The Mainstream Narrative, the Oppressed Narratives, and the Israeli Collective Memory." *Kyoto Bulletin of Islamic Area Studies*, Vol. 3, No.1 (July) : 89-107.
- Morris, Benny. 1987. The Birth of the Palestinian Refugee Problem, 1947-49. Cambridge: Cambridge University Press.
- . 1988. "The New Historiography: Israel Confronts its Past." *Tikkun*. Vol.3. No.6: 19-32, 99-102.
- . 2004. The Birth of the Palestinian Refugee Problem Revisited. Cambridge: Cambridge University Press.
- Nazzari, Nafez. 1978. The Palestinian Exodus from Galilee 1948. Beirut. Institute for Palestine Studies.
- Picaudou, Nadine. 2008. "The Historiography of the 1948 War." *Online Encyclopedia of Mass Violence*. Retrieved July 15, 2010, from http://www.massviolence.org/Article?id_article=143
- Rogan, Eugene L. and Avi. Shlaim. 2001. The War for Palestine: Rewriting the History of 1948. Cambridge: Cambridge University Press.
- al-Sakākīnī , Khalīl. 1955. Yawmiyāt Khalīl al- Sakākīnī: Kadhā Anā yā Dunyā (Diaries of Khalil al-Sakakini: Such Am I, Oh World) . Jerusalem: al-Maṭba` al-Tijārīya.
- Sayigh, Rosemary. 1998. "Palestinian Camp Women as Tellers of History." *Journal of Palestine Studies*. Vol. 27. No.2 (Winter) :42-58.
- . 2007. "Women's Nakba Stories: Between Being and Knowing." In Nakba: Palestine, 1948, and the Claims of Memory. ed. Ahmad Sa`di and Laila Abu-Lughod, 134-158. New York: Columbia University Press.
- Sela, Abraham. 1991. "Arab Historiography of the 1948 War: The Quest for Legitimacy". In New Perspectives on Israeli History: The Early Years of the State. ed. Laurence Silberstein. 124-154. London & New York: New York University Press.
- Shavit, Ari. 2004. "Survival of the Fittest." (An Interview with Benny Morris) *Haaretz Magazine*. 9 January.
- Shlaim, Avi. 1988. Collusion Across the Jordan: King Abdullah, the Zionist Movement, and the Partition of Palestine. New York: Columbia University Press.
- Slyomovics, Susan. 2007. "The Rape of Qula, a Destroyed Palestinian Village." In Nakba: Palestine, 1948, and the Claims of Memory. ed. Ahmad Sa`di and Laila Abu-Lughod, 27-51. New York: Columbia University Press.
- Tamari, Salim. 2003. "Bourgeois Nostalgia and the Abandoned City." *Comparative Studies of South Asia, Africa and Middle East*. Vol. 23. No. 1&2: 173-180.
- Toubbeh, Jamil. I. 1998. Day of the Long Night: A Palestinian Refugee Remembers the Nakba. London: McFarland & Company.
- White, Hayden. 1975. Metahistory: the Historical Imagination in Nineteenth-Century Europe. Baltimore: Johns Hopkins University Press.
- Zurayk, Constantin. 1956. The Meaning of the Disaster. (Translated from the Arabic by Bayly Winder) Beirut: Khayat's College Book Cooperative.

Resisting the Denial of the Event: The Palestinian Challenges in Constructing the *Nakba* Narratives

KINJO Miyuki

Abstract:

The term *Nakba*, currently situated in the center of the collective identity of the Palestinians, indicates the Palestinians' experience of exodus from their land, of becoming refugees, of dispersion, and of homelessness, that accompanied the establishment of the State of Israel in 1948. Like any historical narrative, the Palestinian narratives on the Nakba have gone through a process of giving meaning to individual experiences and creating historiographies. This article deals with the historical process and circumstances in which the narratives of the Nakba have been constructed. The paper is comprised of two parts: first, after reviewing the narratives in Israel and in Arab countries on the 1948 war, it is argued that there is an absence of Palestinian narratives within these narratives. Second, there is a discussion of the Palestinian challenges in overcoming, by means of the memories of the people who hold the experience of the Nakba, their disadvantageous situation in preserving historical documents about the experience. This paper argues the possibilities and limits of history by examining the process in which the Palestinian history of Nakba has been constructed in Palestinian society.

Keywords: *Nakba*, memory, testimony, narrative, historiography

出来事の否認に抗う

——パレスチナ人の「ナクバ」の語りの挑戦——

金城 美幸

要旨：

今日のパレスチナ人の集合的アイデンティティの中心にある「ナクバ」は、1948年のイスラエルの建国に伴う経験であった土地からの退去、難民化、離散、故郷喪失を表す語である。あらゆる歴史の語りと同様、「ナクバ」の語りにも、個人の経験に意味を与え歴史化する過程がある。本論文はパレスチナ人の「ナクバ」の語りが構築される歴史的過程と背景に注目する。

本論文は主に2つの作業を行う。第1に、イスラエルとアラブ諸国における1948年をめぐる語りを概観した後、そこにはパレスチナ人の「ナクバ」の語りが不在となっている点を確認する。第2に、被抑圧的な位置にあるパレスチナ人が、史料保存の点では不利にある状況を、体験者の「記憶」を武器に乗り越える試みを論じる。本論文は、パレスチナ社会での歴史の構築過程から歴史の可能性と限界を論じ、そこで志向されている現在・未来を探求する。

